

# 編集室

\* 本号が読者の皆様のお手元に届くころには、日一日と暖かくなり、梅や桜などの開花情報も見聞きするようになって、春の到来を感じられるようになってきているわけですが、同時に、この時期は「年度」の切り替わりの時期でもあり、学業を修められ就職なさる方や、新しい環境での仕事に従事される方等も、数多くいらっしゃるかと思います。

\* いわゆる、「移動の時期」ということなのですが、これは、日本においては、多くの公共機関で「会計年度」や「学校年度」が4月1日から翌年3月31日と定められていることによるところが大きいのは、皆様も御存知のとおりだと思います。この「年度」という事項をWeb検索してみると、「いも年度」や「大豆年度」といった農作関係から、飲料に関する「酒造年度」、空調・冷却機器に関する「冷凍年度」まで、様々なものがあるようです。

\* いささか話が脱線致しましたが、電子情報通信学会の「年度」も、多くの「学校年度」と同様、4月1日から翌年3月31日となっています。このことが災いしてなのか、学業修了とともに本会活動も停止・終了（退会）されてしまう方も、残念ながら少なからずいらっしゃるようであります。文転就職等で、電子工学や情報通信と直接関係のない仕事に就かれて退会される方は、以前よりいらっしゃいましたが、最近では、「技術者の学会離れ」といって、電子情報通信系の企業で技術者として活躍されている方の学会離れが、深刻になりつつあるようです。

\* これは、産業界において、必ず使われるとは限らない将来のための技術よりも、至近の事業計画において必要とされる技術を重要視するという最近の動向も影響しているでしょうが、それ以上に、最新の研究動向を入手する手段として、学会以外にも様々な媒体が現れてきたことが大きいかと思えます。

\* 電子情報通信技術の進歩のおかげでもあるわけですが、登録さえしてしまえば無料で購読できる電子メールマガジンやWebマガジンの速報性というものには、目を見張るものがあり、同じ土俵上で紙媒体の定期刊行物が勝負することは難しいものがあります。一方で、魅力的な特集記事を武器として有料の技術雑誌も台頭してきており、これとの差別化も学会誌には必要なのかもしれない。

\* 改めて、学会の魅力・特徴を考えて見ますと、同じ技術領域に携わりつつも、教育・研究・開発等、基礎から応用&現場まで様々な所で活躍されている方々が一堂に会していることではないでしょうか。このことを念頭に、会員の皆様方の御協力を引き続き受け賜りながら、より魅力的な会誌になるように努力していきたいと思えます。

(編集特別幹事 安藤 淳)